

新連載

# ああ、猪猟泣き笑い

その15年を振り返り

川崎市 田宮 治

色んなことがありました…



## ① 究極の子犬を求めて

### ●娘からのプレゼント

夢にまで見た「全国猪犬大会」優勝の紀州犬の子犬を手に入れることができたのは、忘れもしない今を遡ること一四年前の平成三年五月三日、連休のことであつた。娘が私の誕生日(本当は三月十日であるが)に、私が一番欲しがっていた紀州犬の子犬をプレゼントしてくれると言うのである。

娘は、私が出猟するときと一緒にの孫「朱里」の母親であるが一四年前のこのときは、彼女が勤め始めて最初の給料だったのである。何とも嬉しい、私にとつては生涯忘れることのできない日になっている。

その日、私は妻と娘を伴い、キジ猟でよく出かける群馬県安中の、本誌「紹介欄」に出ている方のお宅を訪ねた。着いたのが午前十時頃だったと思う。その方は、何でも福田越夫・元首相と親戚とのことで、自宅は広い庭がある大きな家であつた。犬舎は庭に所狭し…の感じで、追い犬のプロットも何頭もおり、うるさいほどの鳴き声だった。

主人は「早かつたね、どうぞ」

と、ニコニコしながら一番奥にある紀州犬の親子の所へ案内してくれた。この日、私がなぜ早く来たのかというところ、「同じ日にもう一人が買いに来るので、一胎の中で一番気に入った子犬が欲しければ、早く来たほうがいい」と前日、主人から電話をもらっていたからである。

紀州犬の犬舎には、六頭の元気で愛くるしい子犬が居た。娘と妻も「可愛い！」と言っている。私は牝で一番大きい、動きの良い子犬を選んだ。抱き上げる手も震えるほどで、二人に「これにしたよ」と言うと、「一番良さそうだね」と言ってくれた。主人は「寝屋止めするよ」と、自信ありげに言い、猪猟についても、また子犬の飼育についても、親切にいねいに教えてくれた。何でも、ここではニワトリの肉を販売しているとのこと、「売れ残った鶏肉が犬の良い体を作るんだ」とも言った。

思えば、何か月前から「狩猟界」の紹介欄を見ながら検討を重ね、娘や妻と打ち合わせてきたのである。一頭目は決まっていたが、この日は、このほかにもう一頭子犬を見に行くことになって

いた。私達は、ご主人と奥さんに礼を述べ、二頭目の紀州犬を求めて埼玉県小鹿野に向かった。途中、安中の山々は、キジ狼でいつも来ている所なので、この辺りの道は地図要らずである。山々は、猟期には見られない美しさで、緑は色濃く、ツツジが真つ盛りで、娘も妻も移る景色に楽しそうに声を上げています。私にとっても、これほど良い連休はない。

長瀬(埼玉県)に着き、見晴らしの良いドライブインで早めの昼食にした。店内では和風の席に案内されたが、時間が早いこともあり、連休だが空いていた。天婦羅の上等品と思われものを注文し、誰はばかりことなく大声で子犬の話をして喜び合った。

食事も済み、小鹿野に向かう。「もうすぐだよ」と目的地を指すが、初めての所なので、迷いながらやつと着いた。午後一時頃であった。そこは、「小鹿野」という地名からの想像した場所とは違って街の中で、道路から少し入った目的のその家はクリーニング店で、犬舎など見当たらず、私は店の中に入って声をかけた。

すると、主人が現れ、ニコニコしながら名刺を差し出した。主人は、建築会社に勤めており、設計士のようなだが、狼をしており、ベテランの獵人のようである。案内された犬舎は家の裏にあった。金網で囲った中に三頭の子犬が居て、三頭は先を争うように金網に飛びつき、私達を歓迎(?)してくれた。

その横に、鳴き声一つ立てずに、堂々とした大型で立派な紀州犬が座っていた。さらに、成犬が五、六頭居たが、主人の説明によると、どれも素晴らしい咬み止め系の犬のことだった。大型で立派な牡は、歳を取って今は使っていないとのことだが、しきりと山に行きたがり、出獵のときなどは可哀想だと言った。「山に行きたい」というその犬の気持ちは私にはよくわかる。かつては素晴らしい猪犬であったろうその犬を撫でてやりたいほどだった。

三頭の子犬はと言えば、相変わらず鳴きながら私達に愛嬌を振りまいている。子犬の仕種をじっと見ていると、どこまでも思いが膨らむ。仕込み始めるには「少し遅いかな」と思われる

が、皆元気で動きも良いようだ。先ほどの子犬が「牝」なので、今度は「牡」と思ったが、残念ながら三頭とも牝だった。その中から一番顔の良い子を犬箱に入れてもらった。

この主人は、子犬の訓練や狼については、さすがにベテランのようで、実によく説明してくれた。特に、この子犬の親は、同じ埼玉県の松本さんの「二郎」号の子であると、誇らしげに話してくれた。

当時は、埼玉県と言わず、全国で松本さんと「二郎」号のことを知らない人はいないほどであった。そして、猪狼をする人なら必ず知っている「全国猪犬大会」の優勝犬が「二郎」号であり、今は亡くなったと聞いたが、そのオーナーが松本さんだったのである。

私は、「追い犬」では、すでに「リオ」号と「トム」号という一流の追いをする犬を使って、主にシカ狼をしており、追い犬が出すイノシシを年間で三頭も獲れば大喜びの、駆け出しの猪狼者で、「止め犬」で行う猪狼の話は、何を聞いても珍しく、意欲が湧いてくるのだった。

主人から「この奥は、すぐに獵場でイノシシも多いから、今度来た方がいいよ」とまで言ってもらい、私は完全に舞い上がってしまった。安中の一頭は娘のプレゼントなので、ここでの一頭は私の財布から妻に払ってもらった。主人に礼を述べ、私達は帰途に着いた。

### ●さあ、訓練開始も：

こうして手に入れた子犬であるから、大切にしないわけがない。「止め猪狼」を志してから初めての子供達であり、特に目をかけ、毎日のように「よみうりらんど」の裏山に連れ出し、何とか引き綱訓練は終わった。

そして、「そろそろ、イノシシに当ててみるか」と思い、松本さんにお願ひして、訓練日を設定してもらった。当日、二頭の子犬を連れて松本さんの訓練所へ行ったのだが、日曜日とあって、すでに三〇人ほどの人が成犬や子犬を連れて集まっていた。どの犬も立派で、良さそうに見えるし、獵人達も皆ベテランのようで気後れしそうであった。子犬を車から降ろし、訓練所の傍の木に繋いで、少しでもこ



まだまだ元気です。群馬より求めた紀州犬「愛号」(15歳)

の場の雰囲気慣らそうと思つた。私は、逸る気持ちごとく抑えて石に腰を下ろし、子犬の頭を撫でながら順番を待った。「次の方：田宮さん、どうぞ」と松本さんが声をかけてくれた。「二頭一緒でいいよ。どうぞ、どうぞ」と、初めて会った私に気を遣ってくれるのがうれしい。「よし、それでは」と、二頭を連れて柵の中に入った。高校時代に、スポーツ選手として決勝大

会に出たときのことが頭に浮かんだ。金網越しにギヤラリーの音が飛んだからだ。心の中で、「舐められてたまるか。俺だって大物獵人なのだ」と、張り切って目の前のイノシシに向け、引き綱を取って頭を撫で、「それ行け！ よしよし、行け！」と当てたのである。当然、吠えつくものと思つていたが、二頭の子犬はイノシシを見ても何の変化もない。私は、

必死にイノシシの前に連れ出すのだが、やはり同じである。ギヤラリーからは、「前に進め」とか、「駄目だ、これは…」とか勝手無責任な声援が飛び交う。「くそ、負けてたまるか!!」と、身を守るコンパネの盾を小脇に抱え直して、一頭ずつイノシシの前に連れ出して向かい合わせたので、イノシシも少し怒ったようで、子犬を追いかけた。逃げ足だけは一流(?)のわが子供達は、すつ飛んで私の後ろに回り込む始末で、手の打ちようがない。とうとう私は、頭に血が上ってしまった。

さらに二頭を連れ、もつと近くに寄ろうとすると、「危ない！盾を前に」と言ってくれるのだが、私はかまわず前に出ようとした。すると、松本さんが「田宮さん、今日はこれまで！ 次の方…」と言い、あつという間に子犬達のデビューは終わった。何とも言いようのない無念さがあったが、ここは一番、笑顔で思い、「ありがとうございませ」と一礼して場外に出た。二頭の子犬であるが、「二郎号」の子には「千代号」、もう一頭は「愛号」と名づけていた。

「愛ちゃん、何だよあのサマは。」  
「恐かったのか千代」と言い、「よしよし」と頭を撫でながら車に乗せたのであるが、心の中では「今に見ている！」と思つていたのである。

しかし、さらなるダメージを受けたのは、訓練大会が終わって猪鍋を囲み、一杯いただいている反省会の席であった。想像もしなかつた言葉が松本さんの口から出たのである。

「田宮さん、あなたの犬(千代号)は、確かに二郎号の子です。今日は図らずも、あなたの子犬と兄妹犬が他に二頭来ていました。あなたも見ていたと思いましたが、三頭とも結果は同じでしたよ。まあ、この三頭は駄目だと思えますよ」と言うのである。私は、わが耳を疑い、「あれほど大事に育ててきたのに」とがっかりし、返す言葉もなかった。さらに、松本さんは、「子犬と言っても、私の三頭の参考犬も、やはり二郎号の子ですが、その子を使ってみたらどうですか？」と言ってくれた。松本さんの人柄から、「千代号」が「二郎号」の子であることに気遣ってくれているのがわかるのだが、



追い犬の全盛時代を作ってくれた「アニー号」と直子「リオ号」(二代目)。アニーの子は多く残っている

### ●未熟さを思い知る

正直、私は言葉が出なかつた。咄嗟に頭に浮かんだのは、もし、このことが娘や妻に知れたら、二人とも私以上にがっかりするであろうということだつた。「ありがとうございます。もう少しやってみてから考えます」と答えるのがやつとであつたが、私の心の中では、持ち前の負けん気が鎌首をもたげていた。このとき、私は「千代と愛、お前達は俺が必ず名犬にしてやる」と、心に誓つたのである。

以後、訓練所通いはきつぱりやめ、山での訓練に没頭することになった。それは、「駄目出し」されたことを娘や妻に知らせるわけにはいかないことと、どうしても二頭を「一流犬」にしたという、二つの思いがあつたからである。幸い、私の犬舎には、追い犬で、今は亡き名犬「アニー号」や、ほかにもそこそこやる犬達が揃つていた。

「アニー号」は、子犬を育てるのが上手で、他の追い犬も「アニー号」に付けて訓練したのである。また「アニー号」は、全

国大会で二位と三位になつた実力犬であり、加えて「千代号」も「愛号」も血統的には何の問題もない。これで仕上げられないはずはないと思つた。

来る日も来る日も山入りが続いた。しかし、追い犬に付けての訓練は、今思うと論外であつた。必ずと言ってよいほど、追い犬に付けて回るのだが、追い犬の持久力に耐えられるものではなく、途中で投げられて迷子になるのである。夕方になつても戻らず、回収に何日もかかることもザラであつた。

引けども引けども、思うようにはいかなかつた。先犬に付けての山回りもできない。当時の「アニー号」はまだ若くて足も速く、三時間でも四時間でも平気で追うため、二頭はついて行けないのである。

今考えれば、実にバカなことであつたと思う。若いのは「アニー号」だけでなく私も同じで、山歩きが苦にならず、二頭の子犬に無理強ひしていたのかも知れない。問題の「訓練」においても、私は若さ(未熟さ)を露呈していたようだ。「止め犬」の訓練は、「追い犬」の訓練の半

分にも当たらない……という簡単なことさえわかつていなかった。止め猪猟の先犬を持たない私には、それ以外の方法がないと考へていた。一獵期使つても、成長は見られず、何の成果も挙がらないことから考えれば、さすがに松本さんの眼力はすごいと思つたものである。

考へた末、「千代号」は、私の仕込み方が悪いのだから。牝だが、こんなに体も立派だし動きも身軽だ。諦めるにはもつたない」と、兵庫の梅元さんに詳細を話して差しあげることにした。梅元さんならベテランだし、きつと何とかしてくれると思つたからである。娘と妻にも事情を話してわかつてもらつた。

しかし、その梅元さんが仕込んで、千代号はバツとしないとのことだつた。そして、猟芸以前に困つたことがあつた。獲物を獲ると、どの犬も寄せつけないほど強く、他犬ともケンカをするとのこと、梅元さんも「誰かにあげるよ」と言ってきた。「ああ、駄目だつたか千代、可哀想に……」と諦め、「千代号」に心から詫びたのだつた。その後私の勘違ひは続いた。

「強い犬が良い猪犬になる」と思い込んで何頭か育てたのだが、やはり先犬が「追い犬」だと、なかなか思いどおりに仕上がらなかった。私は大いに落ち込み、猛省したのであるが……

しかし、強い犬でなければイノシシには勝てない。勝てないということは、イノシシをがちり止められないということだとなれば、やはり血統的にはこれでよいはず。悪いとすれば、それは私の訓練法であり、私自身が未熟なのだ。これが私の出した結論だった。思えば、山梨県の十枚山で、追い犬で初めてイノシシを撃ち獲つてから、早二猟期が過ぎていた。

### ●「ボス」と「アカ」に会えて

猟期が明けると、私は狂ったように「狩猟界」誌の紹介欄を漁り、「これだ」と思えばすぐに電話し、細かく様子を訊いた。そして、気に入った子犬がいれば、どこまでも出かけ、抱き帰つたのである。

その中には、「全猟」三連勝の宮本さんの「シユワ号」の子(牝)とか、ツルギ犬舎の「権助号」という、優勝犬の中でも特に強

い犬の子(牝)もいた。さらには、静岡県浜松の鈴木さんの「ゴマ市号」を種牡としてお願いし、「咲号」という子を持つことができ、「止め犬」の道が見え始めたかに思えた。

子供るときから、いつも犬が傍に居た私の家では、子犬を訓練することなどなかったが、猟期でなくても山仕事には、母犬と父犬の傍らにいつも子犬が居た。その子犬が知らない間に世代を引き継ぎ、その時どきの思出の一流犬になっていたこと



「全猟大会」三連勝の「シユワ号」の直子二代目「千代号」

を思い出し、「止め犬」のベテラン犬の牡牝を……と探して探すことにしたのだが、なかなか「紹介欄」で見つけることはできなかった。

思案の末、兵庫県の渡辺訓練所で開かれていた「全国猪犬大会」で、いつも上位を占めていた高知県の滝本さんに電話し、私の追い犬で一番の「リオ号」が猟期に死んだことと、子犬を付けて仕込みたいので、歳は取っていてもよいので、止めの強い犬を希望し、「ボス号」と「アカ号」をお願いした。

この二頭の犬が、後に私の犬



追い犬「リオ号」。一流芸を見せてくれた

群の芸を作る基礎となつてくれたのである。「ボス号」は、二八kgほどの大きさで、派手さはないが、その強烈な咬み止め芸は、目を見張るものがあった。また、「アカ号」とのコンビも最高で、二頭は私に「止め撃ち」を教え、てくれた犬でもある。

「ボス号」は、その体に似合わずいつもおとなしく、犬舎では寝ている犬だった。また、後に本誌で知つたのであるが、「アカ号」は、全国大会で三位に入賞しており、素早い起こしと、こまめに口をイノシシの足に持つていく一級品の芸を持ち、耳



「チャカ号」の咬み止め芸

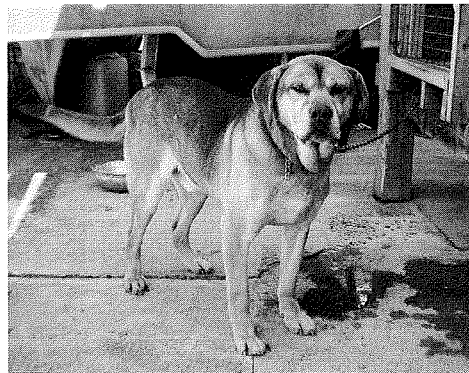
のピンと立った小型の柴犬のよ  
うな犬であった。  
この犬達の芸を見てみると、  
「イノシシの止め芸」の何たる  
かがよくわかり、滝本さんの獵  
に懸ける情熱が伝わってくるよ  
うであった。またこの二頭は、  
彼の獵技術がぎっしり詰め込ま  
れた犬達であり、いつも私を喜  
ばせてくれた。「ボス号」と「ア  
カ号」に出会えて幸せだった。  
二頭のことを思い出すたびに、  
今でも滝本さんに感謝している。  
さて、この二頭に付けて訓練  
が始まった。どの子も紀州犬で



追い犬「チャカ号」。一流芸だったが、山梨県  
の十枚山でシカを追って行方不明。探した  
が見つけられなかった。戻りの悪い犬ではなかつ  
たのに……

牝犬であったが、気にくわない  
とケンカを仕掛けるやんちゃな  
面を持っていた。しかし、「ボ  
ス号」も「アカ号」も、そんな  
子達と争うことは一切なく、少  
し安心して山を引けるようにな  
り、思いどおりの訓練ができる  
ようになったのである。  
訓練の成果は、まず第一に、  
迷子にならなくなった。第二は、  
決して遠駆けせずに、必ず「ボ  
ス号」と「アカ号」について回  
り、私が進む先に居るようにな  
った。そして、ついに「その時」  
が来たのである。

●ついにその「時」が



強烈な咬み止め犬の「ボス号」。子  
犬を多く育ててくれた

ツルギ犬舎からの「富士号」と、宮本犬舎からの二代目「千代号」の二頭の子犬（共に六カ月）を成犬の「ボス号」と「アカ号」に付け、いつものように歩いてみると、止め鳴きのようにだが、少しおかしい。近づいてみると、四頭で大騒ぎである。何か小さい物を奪い合っているようだ。「タヌキかな？」と思つてさらに近づくと、それは子猪だった。成犬二頭の鳴き方が変わったのはそのためだったようだが、二頭の子犬が必死に吠えて咬ん

でいるではないか。それは、私が駆けつけるまでの、ほんのわずかな時間の、実に呆気ない勝負であった。私はわが目を疑つた。とても「芸」と言えるものではないが、まるでぬいぐるみでも奪い合うかのように、吠えては咬み、そして戯れている。とうとう来た。必死に山々を駆け巡つた今までのことが思い出され、ぐっとこみ上げる。私は喜びの中で熱いものを感じていた。どつかと腰を下ろし、長い時間、二頭の様子をじーっと見ていた。山々はまだ青葉だが汗も引き、少し寒さを感じる夕暮れであった。（つづく）



(左)：二代目「ボス号」(6カ月)と  
(右)：「チヒロ」号